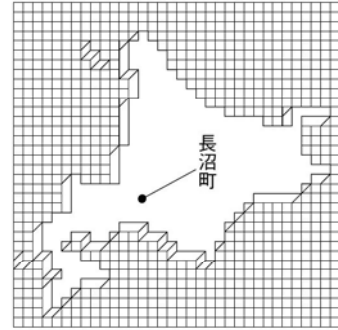


連載



一・はじめに

長沼町は、札幌へは西に車で約五〇分、新千歳空港へは南へ三〇分程にあり、面積の七割を田畑が占め、稲作を始め北海道で穫れる野菜の殆どを生産している農村地帯である。有名な観光スポットや大きなレジャー施設があるわけでもないこの小さな田舎町に年間四千人前後の小中高校生

あのマチ・地域おこし活躍中
このムラ

長沼町の事例

— 緑と水と光のふるさとへ —

が全国からやって来る。大きなホテルや旅館はなく、子供たちを受け入れるのは長沼町の農家である。一軒につき三、四人に分れ、食事や寝起きを共にし、農家の生活を体験するグリーン・ツーリズム、長沼町では九年前から修学旅行生の受け入れを行っている。



(道道札幌夕張線を長沼町市街へ)

No.72

(長沼町のグリーンツーリズムの受け入れ状況)

(回数・人数)

区分		平成17年度		23年度		24年度		25年度		26年度予定	
農家 民宿	修学旅行	1	154	24	3,929	22	4,035	20	3,704	19	3,537
	一般	1	11	4	21	5	18	3	76		
農業体験		7	860	7	1,314	6	1,045	4	480		
計			1,025		5,264		5,098		4,260		

二・修学旅行生たち の生の声、帰宅後 の便り

修学旅行生のファームステイの前と体験したときの生の声を以下に紹介する。

「ホームステイや農業は一度も体験したことがありませんが、どんなものか今からとても楽しみにしています。迷惑をかけないよう頑張ります。」(ある女子中学生の自己紹介より)

「これ小豆です。いつもスーパーに並んでいるものは、何か感じが違う。これ、たぶん美味しいと思う。おじさん、今晚これ食べたい。」(農作業体験で小豆を収穫した女子小学生)

「店に並んでいるものを東京では当たり前のように食べ

ていたけど、収穫するのがこんなに大変なことだとは知らなかった。東京へ戻ったら多分感覚が変わると思う。」(農作業体験で長ネギの収穫をした男子高校生)

「トマトがなつていているのを初めて見た。美味しくするためにいろいろな工夫をしているんだね。」(農作業体験でミニトマトを収穫した男子高校生)

「ジンギスカン見たのも食べたのも初めて。メツチャ、美味しい」(夕食での女子高校生)

「今までこの野菜を食べられなかったけど穫れたて新鮮だと食べれた」(夕食での男子中学生) などなど。期待と不安が未体験の感動に変わっていく様子がうかがえる。

また、生徒たちからの帰宅

後のどの便りにも、優しい笑顔で最初の緊張をほぐしてくれた長沼のお父さん、お母さんへの感謝、長沼の空気のおいしさ、都会のどこか排他的な建物だらけの景色と違いどこまでも続く田畑しかない風景、夜の暗さや手の届きそうな星に感じる郷愁めいた安心感、農作業は大変だったが充実感があつたこと、収穫した野菜などを共同調理し、大勢で食べる食事の美味しさ、家族との賑やかな楽しい団らん。たつた二日間前後のつきあいが愛おしく、その時に戻れるなら時が止まって欲しいとの思いが綴られている。そしてどの子たちも自分のステイ先が最高だったと言っている。また、親が感謝している。学校も感謝している。

こんなうれしいことは無い

ですよ。これじゃあ、長沼の農家さんたちは修学旅行生のファームステイ受け入れを止められる訳がない…。体が動く限りは…。

なぜ、修学旅行生たちがこども感動し感謝しているのだろうかと考えたとき、彼らのもう一つの言葉が見つかった。それは慣れない農作業が上手に出来ず、ミスばかり繰り返しても、ミスを許してくれ、



(ファームステイ受入式)



(はいっ チーズ!)

丁寧にも何度も分かりやすく教えて貰ったという「感動」の言葉であった。都会の子たちだけではないかも知れないが、恐らく、他人に親身になって接して貰った経験があまりないのだろうと、推測される。子供達にとって、身近になかった人のあたたかさというものが、長沼の農家さんたちには当たり前のことであるが、魅力となっているのであろう。



(ファームステイ先での食事)

三・長沼のお母さんたちの気持ち

長沼町のグリーン・ツーリズムは修学旅行生にすこぶる評判が良い。

受け入れる側の姿勢を長沼のお母さん代表として、農家民宿・ファーム「こまたに」(駒谷作江)の駒谷保子さん(指導農業者)に話を聞いてみた。



(ファームステイ先での食器洗い)

家族構成は？

「夫(六六歳)、息子(三七歳)夫婦の四大家族です。一昨年主人から息子に経営移譲をしました。」

「ファームステイの受け入れは、保子さん夫妻だけでやられているんですか？」

「私たちは畑へ連れて行ったりし、食事はお嫁さんが担当してくれており、分担作業でやっています。」



(お別れ)

「ファームステイの受け入れは、いつまで出来そうですか？」

「とにかく楽しいので元気なうちはやりたいと思ってますし、息子たちも続けてくれると思っています。」

「楽しいというのは、具体的にどのような点にそれを感じますか？」

「都会からこの田舎に来たわけですから、見るもの、聞



(農作業体験で指導する 駒谷保子さん)

くもの、感じるものがすべて新鮮なようで、何にでも喜んでくれるのが自分のことのように嬉しいのです。私たちが日ごろ当たり前のように思っていることが逆に見えてもらうことがいっぱいあるんですよ。また、子供たちからは都会の流行のお話や消費者がどんなものを求めているのか教えて貰っています。別れるときは、泣き出す

子もいて本当に感謝してくれて、帰ってから手紙をくれます。ある進学校の子が来たときなんか、主人が「お前らが官僚になったら、この長沼のこと、北海道の農業のことを頼むぞ」としきりに言っていました。帰ったら、長沼のことを思い出して欲しい、長沼の応援団になって欲しいとみんなが思っています。」

生徒たちにはどのような方針で臨んでいらっしゃいますか？

「私たち農家の普段の生活を体験して欲しいと願っています。ですから、我が家ではお風呂も内風呂に入って貰っています。子供たちを長沼温泉に連れて行ってあげているファームもあり、仲間の子から「お前たちも温泉に来いよ」と携帯で誘われた子がいたんですけど、うちの方針を説明し、わかしてもらいました。また、親御さんが言わないような躰についても遠慮なく言うようにしています。」

「例えば五月の田植のシーズンとかですと、うちは米を作っていないので、率先してファームステイを受け入れるようにしております。農家の間で融通しあつて段取りするようにはしていますが、農繁期と重なるのは仕方がないと思っています。子供たちが喜んでくれることの方が嬉しいし、やりがいを感じています。」

「修学旅行の時期は決まっているので、忙しい時期に重なることもあるのですか？」

「農作業体験での生徒たちは労働力とは期待していないと

思うのですが、農作業体験をして貰う上でのご苦労は？

「今は定型的になつていますが、何をして貰うか悩みました。当然、過重な作業とか危険な作業をして貰う訳にはいかなのですが、農作業の大変さを知ってもらいたいし、そこから生まれる食べ物の大切さを知って欲しいと思つています。収穫作業したばかりの野菜を食べたら、おいしさも倍増しますし、何よりも長沼の印象を心に留めて帰って欲しいと願っています。」

「ファームステイ受け入れで、改善したいと思う点などはありますか？」

「ファームステイ前に世話をする子供たちのプロフィールなどが送られてくるのですが、家族構成などもっと詳しいものにして貰えれば、対応の仕

方もいろいろ出来るし、さびしい思いをさせることもないと思うのですが：」

（個人情報保護法などを理由に学校によって扱いがさまざまであることが産業振興課グリーン・ツーリズム推進室 桃野主査から説明された。）
「生徒たちのまた来たいという声もかなり多いと聞いていますが：」

「本当に大勢の子がまた絶対来るからねと言つて帰つてくれます。長沼は遠いですから、私たちは社会人になって自分のお金で来てねと言つています。」

ファーム「こまたに」には、『思い出ノート』と称し、ファームステイした子たちの写真、プロフィール、感想文、帰宅後の手紙、親や学校から

の感謝のお礼などを綴った資料が厚さ一〇cmほどのファイルに九年分、二冊半保存されている。

四・修学旅行に

ファームステイを
取り入れる学校側の
狙い

学校によっては全員が同じメニューではなく、海外旅行とかいくつかの選択肢がある中から生徒がファームステイを選択する学校もあるという。では、学校側がファームステイを取り入れる目的はどこにあるのだろうか。ある中学校から長沼町グリーン・ツーリズム推進協議会に届いた札状を紹介する。

『：生徒にとつて、学校から離れた農家において、新し

い人間関係のもとで体験活動ができたことは、生徒自身の目を社会に向けさせていたただけでなく、これからの自分を見つめる良い機会になったと思います。また、この「ファームステイ」の活動を通して、社会で働くことの厳しさ、挨拶や礼儀の大切さ、他者への思いやり、人に感謝する気持ち、自己の適性や自己の新たな発見など、大きな影響を受けたことと思います。この「ファームステイ」での体験活動を活かし、生徒たちがさらに成長していけるような教育活動に励みたいと思います。有難うございました。』

五・長沼町のグリーン・ツーリズムの 現状と課題

日本においてグリーン・

ツーリズムは、バブル経済が崩壊し、手当たり次第のリゾート開発への反省、農山村の多面的機能への着眼から平成一四年に農林水産省グリーン・ツーリズム研究会の「中間報告」にグリーン・ツーリズムを政策として提起されたのが端緒である。

長沼町においては、G A T Tウルグアイ・ラウンド農産物自由化交渉及びプラザ合意による円高のために農産物の輸入が進み、農業を取り巻く環境の閉塞感を打破したいと、ヨーロッパ型に学び、農産物に付加価値を付け、直売など消費者との距離を詰め、農村の景観、生活、空気、農作業を売りにしようと考えたのである。

長沼町のグリーン・ツーリズムは、町と農協で平成一五

年に「長沼町グリーン・ツーリズム研究会」を立ち上げ、特区認定の申請など制度作りを取り組み、平成一七年度より受入が始まった。修学旅行が多いのは、たまたま第一弾が修学旅行で、評判が人気を呼び、今では二年先の予約まで埋まっており、お断りしている学校もかなりあるという。ファームステイ受入農家の戸数は長沼町の農家戸数約八〇〇戸のうち平成二五年度において旅館業許可取得者は一五二戸となっている。需要との兼ね合いから二〇〇戸程度欲しいところだが、近年、若干減少傾向となっている。

修学旅行が入っているときは、大事な生徒さんたちに何かあつたら大変と、役場の産業振興課グリーン・ツーリズム推進室が二四時間体制で携

帯電話を持ち待機している。最近では、食物アレルギー、動物アレルギーを持つ子も多く、事前の聞き取り調査で受入先を決めているという。「うちの子にはこれを食べさせて下さい」と、冷凍食品を送ってくる親御さんもいるという。

長沼町では、修学旅行受入時に温泉優待券やジンギスカン割引カードを農家に配布し、商工会、町民も一体となってグリーン・ツーリズム事業に参画、協力している。

六・長沼町オリジナ ルのグリーン・ ツーリズムに向け て

グリーン・ツーリズム事業の効用、期待として、農家の収入増、地元経済の活性化を

第一に挙げる向きがある。しかし、前出の駒谷保子さんは、「単に収入を上げようと考えらるなら作目を増やすなどした方がいい。それ以上の充実感が修学旅行生の受入にはあるんです。」と言ひ、JAがぬま大和田営農推進係長は「お問合せのあつたファームステイをした学校や農業体験をした道内の学校が長沼の農産物を買ってくださいいます。農協全体の販売事業の中の金額は小さいですが、中には学校祭の催しで使われるということ、十万円単位で買ってくださいる学校さんもあります。」と言ひ。前出グ

リーン・ツーリズム推進室桃野主査は「町内への経済効果は確かにあると思います。年間四千人掛ける平均二泊弱掛ける宿泊料、引率の先生も同

様に長沼温泉に約二〇〇人分の宿泊料のお金が長沼町に落ちる訳ですから。でもそれより、何もないこの町に年間四千人の人が訪れてくれる、町民も関心を持ち、町内の美化も進みます。修学旅行生たちは泣いて別れを惜しむほど感謝し喜んでくれますが、実は農家さんたちも生きがいを感じさせてもらっているのです。このことの方が大きいと思います。」と言ひ。

最後に、今後の展望も含めて、長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会駒谷信幸会長に締めていただくこととする。「私が農協の組合長をやっている時、消費者との距離がいつの間にか離れてしまっているなと感じ、それを縮めるには現場に来て見てもらうのが一番だと思つた。農村の景



(駒谷会長と修学旅行生)

観たとか空気を直に肌を感じてもらいたい。高校三年生なら高校三年生の孫が毎年遊びにやってくる。毎年新たな出会いがある。何とも楽しいものだ。」

「都会の人にしてみればこの田舎にただけでもものすごく目の輝きが違う、たつた一泊か二泊しかしていないのに来たときのその人と帰るときその人とは別人、素直にな

る、優しくなる、人間の原点みたいなものに触れてそういう輝きになるのだろう。見るからに悪ガキみたいなのが悪さをして問題を起こしたことはまだ一人もいないんだから。」

「全国に長沼の子供たちがどんどん増えていくのが楽しみです。」

「小さな種を蒔いて、それから芽が出て、いろんな農産物が実るということも子供たちにしたら感動で、大都会から来た子たちの目を通して、農業ってこうなのかと我々も再認識したり、あるいは夜は暗いというのは田舎では当たり前なことなのに、都会から来た子は「え〜つ夜が暗い、星がきれい」とかいつて驚いている。それは僕たちも忘れて

いたここの良さだよ。農業の大切さ、あるいは食べ物の大切さ、命を頂いて自分の健康を維持しているということを理解してもらって、子供たちが親になつて子供を連れて訪ねてくれるとかいう付き合いが何代も続けてきたら最高の幸せだね。」

長沼町のグリーン・ツーリズムは、町民の今の生きがいであるとともに、将来の長沼町農業のため、北海道、いや日本の農業のために、そして未来の長沼町のために種を蒔いているのであろう。

長沼町のグリーン・ツーリズムは、成功裏に今年一〇年目を迎える。長沼町グリーン・ツーリズム推進協議会では、これから一〇周年記念事業を企画することである。

【取材後記】

ファーム「こまたに」の『思い出ノート』を閲覧させていただくと、何種類ものカラーペンを使って単語ごとに色を変えて書かれた文章や、とにかく絵や記号ががいっぱい登場する手紙が目立ち、記者は戸惑うばかりであった。ただどれも長沼のお父さん、お母さんに向けた感謝、ファームステイの楽しかったこと、食べ物の大切さを知ったことなど、この体験を忘れないで元気に勉学に励んでいくという内容の手紙であった。

一般社団法人 北海道地域農業研究所

特別研究員 西野 義隆